

平成22年7月10日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

第92回全校高校野球選手権大会茨城県大会は今日開幕します。これに参加する本校選手の健闘を願って止みません。手元に昭和27年の県大会のパンフレットがあります。参加校は35校です。勿論土浦一高も組合せ表にあります。それどころか準決勝で水戸一高を破り、準決勝まで駒を進め、惜しくも水戸工業に破れています。この時期、本校は県4強の常連校でした。甲子園に出場したのはそれから5年後のことです。

←明治39年頃の土中野球部選手たち(創立70周年記念誌「進修」より)



## 分校時代の野球部

本校野球部の創部は今から百十数年前の分校時代にまでさかのぼる。当時、生徒達に人気のあった野球は運動会でも欠かせない花形種目であった。『進修』創刊号(明治33年1月刊)には、明治31年6月(春季運動会)と11月(秋季運動会)に行われた校内野球試合の様子が詳細に記されている。

また、明治31年12月に組織された進修会の会則にも「本会は雑誌部・演説部・体育部の三部から構成され、体育部には撃剣柔道科と野球遊戯科の二科を置く」と明記されていることから、早くも野球部が存在していたことがわかる。

## 練習は神立原

授業を受ける教室にも事欠く不自由な学校生活を強いられていた分校時代であったが、野球部の活動は盛んであったようだ。「ふだんは、土浦尋常小学校の校庭を借りて練習をしていたが、日曜日ともなると、脚絆に地下足袋姿で、鉄道線路を辿って神立原まで出向き、練習試合などをした。」(『進修百年』平成9年11月刊)とあるし、また『進修』第二号(明治33年9月刊)には、「草青く地碧なる神立原、たんぼぼ乱る、頃も、千草の花の錦織りなす頃も、《中略》うつ球の強き思ひもて、鳥の啼かぬ日はあれど、ボール取らざることなく飛球の速きは、電の如く、打球の強きは、鉄も砕けむばかり」と神立原での熱の入った練習の様子が書かれている。

## 初の対外試合

『進修』第二号は更に「下妻野球選手よりの、挑戦状は来ぬ、時恰も、修学旅

行のあるを機とし、戦は十五日を以て開くべく」と続く。(修学旅行とは土中の教師をまじえた五〇余名の日光旅行)そして「枝静かならむと欲するも、風止まずとや、あゝ雨は降り来りぬ、されど横瀬審判官の一令の下に、戦は開かれ、吾先づ攻軍たるも、如何せむ、雨はふりに降りしきり、球は濡れて手にも止らず、足はすべりて地につかず、空しく涙をのみて、靈腕施すに由なき時の、口惜さは如何はかりぞや」と下妻リードで展開したが、雨のため三回で中止となった試合の顛末を記している。

この対抗試合について、明治36年版の『野球年報』に、下妻中からの投稿記事が記載されている。「好敵手を待ちし折柄、県下土浦中学より挑戦あり、時は明治三十二年十月廿有余日」と土浦中より試合を申し込まれたとし、両校の雨中戦の経過を次のように述べている。

「当校選手の初陣たる対土浦中学試合は当校に於て催され、《中略》攻守手幾度か交代しつと一刻戦いは猛烈を加えんとせし折りしも、朝来の雨雲いや垂れて終に雨滴を飛ばし、雨中の戦況壮烈云わん方なし。何れも責任を負う健児の雨もものかと叫びつと死に物狂いに戦いしが、猛雨沛然として風さえ烈しく、戦は終に中止せられたり。勇士の痛恨思つに余りあり。」

また、後年、飛田穂洲も「このチーム(下妻中)の最初の対抗試合は明治三十二年十月、土浦中学の挑戦に応じて自校庭に戦ったのである。この時土浦軍は草鞋脚絆の旅装を整えバット・ミットを肩に筑波山を廻り数里を踏破して下妻に乗込んだ。《中略》不幸三回にして大雨のた

下妻中学校は、明治30年4月、茨城県尋常中学校の分校として、土浦分校と共に設立された。当初は下妻町本宿の新福寺を仮校舎としていたが、明治32年4月には雨天体操場、同年9月には新校舎が完成している。また、生徒達の手も借りて運動場も整備された。(土浦分校の新校舎が完成するのは明治32年12月で、運動場の土盛り工事が済むのは明治34年になってからである)



完成当時の下妻分校新校舎(明治32.9.6)  
土浦分校の立田校舎もこのような建物であった。

め中止となった。スコアは下妻の十三、土浦の一で土浦軍の旗色は極めてよくなかった。(野球人国記)と書いている。ともあれ、本校にとって最初の対外試合は雨天中止とはいえ三回までのコールドゲームの惨敗であった。

## 果し状はどちらからっ?

ここで、興味深いのは、この試合を巡っての両校の記録に微妙な違いがあることです。

まず一つは、試合の申し込み(挑戦状)はどちらからなのか、という点です。双方、挑戦を受けたとしています。第三者である飛田穂洲が『野球人国記』に土浦中学の挑戦に応じた試合と記しているが、文面から下妻の資料に基づいて書かれており、疑問を解くに足らない。

このことについて、今となってはもはや解明の術はないが、どうも土中側からの申し入れではないかと思えてならない。下妻からの挑戦を、事前から計画されていた日光への修学旅行途中に受けるというのは不自然だ。むしろ土中側から試合を申し入れ、対抗試合を旅行の日程に組み込んだと見た方が無理がない。この試合に本校が勝利していれば、そうした記録が残されたい。挑戦状を突きつけて臨んだ結果の大敗では何とも格好がつかないからである。

もう一つは、下妻が、「回数前後三回、彼得る所一、我は十三点を得たり。」とスコアを記しているのに対して、『進修』の記録にはそれが無い。雨のため捕球がままならず、ぬかるみのグラウンドに足をとられて思うようなプレーが出来なかったと嘆き、『幾夜の夢に入りけむ』この戦も遂に画餅となりぬ、されど当日三回迄の有様は、いはましけれど、吾にこを記すへき筆なきを如何せむ」と試合の勝敗については明記していない。

勝負は勝つか負けるかの極めて単純明快な結果の世界である。しかし、勝者と敗者では、その結果の受け止め方に大きな違いが生じてしまう。その勝負は時間を経た後世における評価すら異なったものにしてしまうことがあり得る。

『下妻第一高等学校野球部史・中学時代

篇』(平成15年刊)で「この試合は、県内で県内の学校どつしがおこなった最初のものとして記念すべきものである。」とその意義を評価しているが、『土浦中学校野球の記録』(平成13年刊)では「土浦中学にとって記念すべき試合が行われた。」とあるだけで記述は素気ない。両校の歴史認識の違いといえ少々大げさなもの言いかもされないが…。

### 因縁の対決

明治33年4月に、土浦・下妻両分校はそれぞれ土浦中学校・下妻中学校として独立するが、下妻中は一高(現東大)選手のコーチを受けたり、当時連戦連勝不敗を誇っていた水戸中に挑戦して勝利(明治34年10月)するなどますます野球熱は高まっていた。本校でも立田校舎の運動場で練習ができるようになり、竜ヶ崎分校との練習試合も頻繁に行われていた。勿論運動会での学年対抗試合や校内紅白戦(各級連合野球試合)は「快晴微風だにない、のどかな春の日に、見物に来る者百数十人。」『進修』第五号)とあるように大変な人気であった。

また、同号には、明治36年7月に行われた「土浦対下妻四年以下野球試合」の詳細な試合内容が記録されている。そして大差を以って土浦が勝ったことを次のように大げさに報じている。

「勝利！勝利！勝利！我校はじまつての大勝利！即ち三十一に對する彼れオソリイ。」また、「敵の打球外野に飛びしものなく一般に外野諸氏は暇なりしは御気の毒なり」といささか調子に乗った記述である。

同年10月に再び対下妻戦が行われて

いる。この試合を飛田穂洲は「明治三三年下妻に遠征して不覚をとってから彼等は、二年に亘る練習を積み再度下妻征討の軍を起し、例の如く草鞋脚絆に身をかためて筑波山を廻り下り下妻城下に押し寄せた。三六年一〇月四日筑波の峰は漸く色づかんとするころであった。試合の前半土浦軍の形勢甚だ悪くまたしても下妻軍の下風に立つかと思われたが、後半に入りて大いに揮い十対六をもって見事これを蹴破(後略)」と先の『野球人国記』で述べている。この戦いの様子は『進修』第五号でも「戦勝記」として「亀城壁下の九名土臥薪嘗胆の練習はそも誰が為ぞや。勝つも負くるも一場の夢という事勿れ勝てば官軍負ければ之れ賊九士の勝負は亀城五百の名栄存亡の関するあるを。」と名文調で綴っている。

### 県中等野球大会始まる

「この年(明治37)土浦中学の呼びかけで第一回の中等野球大会が開催された。飛田穂洲によると『六月下旬土浦中学より県下大会を開催し大いに県内の士気を鼓舞しようといふ勧誘状が舞い込んだ。無論水戸中学は無条件で賛意を表し、期日は八月一日、土浦在神立原を会場に定め、土浦中学は主催校として万事に幹旋することになった。これが茨城県下大会の嚆矢である。土浦は水戸をはじめ下妻、竜ヶ崎、太田、水海道に勧誘状を発送したが、この時参加したのは、僅かに土浦、水戸、竜ヶ崎の三校に過ぎなかつた』(『野球人国記』。大会の四年後、穂洲は『いはらき新聞』(明治40・7・30)に、『第一回県下の大会は四年前、該校が發起して神立原に開催したのが初めてで、

今日の如き立派なものになったのであるから、大会に於ては土浦中学が最大の恩人とも云つべきである。』(以下略)と書いている。

この大会は「連合野球大会」といわれている。本校の不参加の理由については不明だが、明治34年の対水戸中戦で、学校の不許可にもかかわらず、応援団の強行遠征事件が尾をひいて、学校当局の許可がえられなかつた公算が大きい」『下妻一高野球部史・中学時代篇』。

今から百年余り前に、現在の全国高校野球選手権茨城大会の原点ともいえるこの県大会の開催を提唱し実現させて、県球界から高く評価された本校野球部だが、このことを伝える本校内の資料は乏しい。『進修』第六号(明治38年4月刊)に、年度、開催地も記されていない「土浦対水戸野球試合」と「土浦対龍ヶ崎野球試合」の記録があるのみである。

水戸戦については、「水戸中学勝利の万歳を叫びたりき、諸君よ！ 記せよ！ 七月二十八日、オソリー一点の差を以つて、亀城の健児をして敗奴の名をとらせたるを！」とその悔しさを述べ、続く龍ヶ崎戦については「七月二十日、此日の戦ひはもの、美事に、敵軍を打ち破りたるを！ 吾が得点十一、敵の得点オソリー、：龍軍の士は悄然として去り、吾軍の士は昂然として去る、野はやがて夢の如く暮れたる也」と勝利を喜ぶなど、試合の勝敗に一喜一憂しているだけで、連合大会の意義にまで言及していないのが惜しまれる。

ともあれ、今年も暑い夏が始まる。僅か三校で始まった連合大会を顧みるに、一〇三校参加の球宴は殊更興味深い。